

# 靖國に祀られた 京都の郷士たち

京都偕行会長

樋端 一雄 東幼48

京都東山の祇園さんから清水寺までの道は京都観光のメインルート。その中ほどに位置する高台寺の南の道を左折して急坂を登りつめると、京都霊山護国神社に達する。慶応4年（1868年）明治天皇から「維新を目前に倒れた志士たちの御霊を奉祀する社を創建せよ」との詔が発せられ、この霊山の地に招魂社を建立した。九段の靖國神社より古い歴史を持つ。

ご祭神は坂本龍馬、梅田雲浜、吉村寅太郎、久坂玄瑞、高杉晋作ら幕末勤王の志士たちや戊辰戦争をはじめとする大東亜戦争までの戦死者（京都関係）まで、合わせて約7万3千柱である。

そして東京の靖國神社は明治2年、明治天皇の思召しにより建立の東京招魂社が始まり。明治12年、靖國神社と改称され、戊辰戦争、明治維新の戦死者をはじめ、大東亜戦争の戦死者までの246万6千余柱の英霊を祀る。

昨年、平成29年（2017年）は、大政奉還（慶応3年11867年）から数えて150年である。

明治維新に際して、京都北部・丹波

の山村「山国」の農民たちは「山国隊」を組織して武装蜂起した。彼らの中心は、「郷士」と呼ばれた地域のリーダーたちで、「山国隊」は1年余り国内各地を転戦して、7名の犠牲者を出す。

山村「山国」はかつての京都府北桑田郡山国村で、町村合併で京北町となり、平成17年に京都市右京区に編入された。その京北町烏居町にある山国護国神社（明治5年建立の招魂社）は「山国隊」7名の御霊を祀り、慶応4年の安塚の激戦で隊員3名が戦死した4月22日を記念の日として慰霊祭を行っている。この神社と国道を隔てた山国神社は宝亀年間（770〜780



年)創建の鎮守で、「山国隊」が出陣の誓いをした社である。そして例年10月第2日曜に例大祭を催す。

今年も10月8日に山国神社周辺で「山国さきがけフェスタ」が催された。

毎年、京の時代祭行列で先頭を務める維新山国勳皇隊が地区内の約10kmを練り歩いた。「官軍山国隊」の旗を先頭に、「魁」の文字を冠した熊毛の陣笠姿の隊長はじめ鼓笛隊、鉄砲隊など約60人で、堂々の姿を披露した。彼らは京の時代祭の第1回(明治28年)から大正時代中ごろまで参加し、行列の先頭を務めていた(現在は京都市中京区民が奉仕する)。



さて春の葵祭、夏の祇園祭と並ぶ今秋の「時代祭」は、10月22日に都大路に千年の歴史絵巻を描き出すべく準備していたが、猛烈な台風21号の襲来で中止され、期待していた観光客を落胆させた。

「ピーヒャラー・ドン」と、鼓笛隊の奏する勇ましい進軍の調べに乗って、維新勳皇隊の若者たちが時代祭の先陣を務める筈であった。その行列は明治維新から藤原・延暦まで、そして最後尾の弓箭組まで数えると20列、2千人による「歩く京の歴史」だった。「宮さん宮さんお馬の前に…」の、

あの歌の主人公である維新勳皇隊のふるさととは前述のとおり、京都市右京区京北町である。この地はかつては丹波国山国庄であり、平安京の背後に連なる丹波高原に位置した「御袖」として、皇室領の木材供給地であった。平安時代から戦国時代の終わりにかけて、この山村社会にも「名主層」が発生する。ところが太閤検地で名主層が管理する神領・私領は没収、小作人たちに分与されたので、古い秩序の崩壊が始まる。さらに幕末期には旧来の名主層と台頭する富農層との間で主導権争いが浮上する。

幕府の大政奉還による明治維新はこの名主層にとって体制挽回の絶好の機会となった。維新政府は徳川残存勢力

一掃のために各地へ治安維持の鎮撫隊(官軍)を派遣するが、山国村の名主層は維新政府に恭順するだけにとどまらず、山国隊を組織して従軍を志願した。彼らは名字帯刀を許された「郷士」と呼ばれた人たちが主体で、西園寺公望公の檄に応えて立ち上がった有志は83名に及んだ。その中の34名が山国隊

で、慶応4年2月、隊長の因幡藩士に率いられて氷雨降りしきる京都から出陣した。組頭は山国郷士リーダーの藤野齊が務めたが、隊内では郷士たちと従士階級との確執もありその調整に苦勞する。また鉄砲20挺をはじめとする彼らの装備品はすべて因幡藩からの借用品で、行軍中の全費用も隊員の自弁であった。その額8千両といわれ、このことは以後の山国村の財政を苦しめることになる。

山国隊は3月、甲州勝沼で近藤勇らの甲陽鎮撫隊と交戦し、これが初陣。その後、江戸に入ってフランス式訓練と軍楽教育を受け、さらに宇都宮へ進撃する。4月22日の安塚村(現在の栃木県壬生町)の戦いでは孤軍奮闘の激戦となり、3名の戦死者を出した。

宇都宮方面の転戦から江戸に帰った山国隊は5月に上野東叡山にたてこもった彰義隊と交戦、隊員1名が戦死する。その後、奥州方面を転戦の後、10カ月ぶりに京都へ凱旋したが、山国

隊34名の誇りの背景には戦死者4人、病死者3人、若干の重軽傷者という犠牲があった。

山国隊のリーダーとして活躍した藤野齊にまつわる話がある。山国郷士である彼には妻がいたが、京都の花街の一つ上七軒の芸妓(牧野やな)とのロマンスもあった。2人の間には2男1女が生まれたが、次男は「日本映画の父」と呼ばれた牧野省三で、行動力とアイデアで日本映画の礎を築いた人物、そして省三の子の雅弘・光雄兄弟も映画製作者、監督として活躍した。

時代祭の先頭は維新勳皇隊だが、最後尾を務めるのが、丹波の郷士集団で組織する「弓箭組」である。戊辰戦争では山陰道の鎮撫総督・西園寺公望の護衛として活躍した。このほか京都周辺には朝廷の所領が多く、名字帯刀を許された郷士たちが多数存在し、維新での彼らの活動が伝えられている。慶応3年に結成が認められた山科郷士(現京都市山科区)は御所警備にあたり、函館五稜郭の戦いにまで従軍したという。そのほか南山郷士(南山城の各村)や大原(現京都市左京区)郷士、両苗郷士(現亀岡市)ら多くの郷士たちの活躍も伝えられている。

【参考文献】「山国隊」仲村研、「丹波山国隊」浅川道夫、前原康貴、「戊辰役戦史上巻」大山柏